

光る未来に全ツツパ。

12

『光る未来に、もう一度全ツツパ』

最終話

「今日が、最後の撮影やと思うと……ちょっと緊張するな」

「なんて？ いつも通りでいいやろ」

「いや、今日はちょっと違う。最後のツツパって、カッコええやん？」

「それ、自分で言っちゃああたりがカッコ悪い」

「ううっ……！」

松阪「バチンコラストステージ」——初めて来たホール。この街でも再生された廃墟ホールとして一部で有名な場所だ。

壁には色あせたポスター、BGMは少し音割れ、台数も少なめ。でも、不思議と落ち着く。俺とミサキの「ラストバトル」には、ちょうどいい舞台だった。

「じゃ、カメラ回すよー」

「OK。『未来に全ツツパ編』、ラストバトル、いっくぞー!!」

実践機種は、ふたりとも『スマスロ北斗の拳』。やつは最後は、これやないとな。

ミサキは1,000円で中チェを引いて、早々にAT突入。こっちは朝から黙々とハマる。2万ストレート。心も財布も寒い。

「やべえ……この台、俺の人生を映してる……」

「それ言いすぎたら炎上するよ」

「人生無想転生ゾーン未到達」

「やかましい」

午後。ミサキは順調に伸ばして4連勝、2,000枚オーバー。俺は缶コーヒー片手に虚空を見つめていた。

「なあミサキ……一回でええから、その引き分けてくれやん？」

「じゃあ、1万円ちょうだい」

「財布空や……！」

「ダメじゃん」

ふたりで笑った。

こんなやり取りも、あと少しなんだなと思った。

でも——その終盤、ドラマは起きた。俺の台に、『無想転生CHANCE』のカットイン。

「来たアアアアアアアア!!」

隣でミサキがびくっとなる。

「うるさい！ ホール全体に響いてる！」

「これが……俺の！ 未来を賭けた一打ッ!!」

レバーオン——

——成功。

無想転生バトル突入。

そこからは、夢のようだった。

ケンシロウが、何度倒れても立ち上がった。レバーオンのたびに、拳に光が宿る気がした。

閉店ギリギリで、1,900枚。差枚的にはミサキにちょっと負けた。でも、もう勝ち負けじゃなかった。

帰り道。

カメラを止めて、ふたりで歩いた。ネオンの光が遠ざかって、松阪駅の夜風が静かに吹いていた。

「なあ、ミサキ」

「なに？」

「ありがとうな、ここまで」

「どうしたん、急に」

「今日、撮ってて思ったんよ。俺ら、けっこう頑張ったな」

「……そうやな」

「マジで、最初はこんな続くと思ってなかったし。スロットで生活するとか、夢物語やと思ったし」

「……うん。でも、なんだかんだここまで来

たし。意地でも全部、動画にしたしな」

「なあ」

俺は一步、前に出た。

「これからも一緒に『未来に全ツツパ』しようぜ？」

ミサキは、驚いたような顔をして、少し、笑った。

「……ほんと、バカ」

「バカで結構」

その動画は、ラストにこう書かれていた。

「この物語はフィクションです。だけど——夢とバカとスロットに全ツツパした時間は、本物でした」

コメント欄には、【お疲れさま】【ありがとう】【寂しくなる】の音が並んだ。

風の中。足元に落ちたメダルが、ひとつだけ転がった。

拾い上げて、俺はミサキに言った。

「これ、未来行きのコインや」

「……じゃあ、その隣の席、私が取っとく」

ふたりして、笑った。

《完》

